十八（とうはち）

とうさんとかあさんといであったどよ。かあさん、おなが大きくて時きたばよ、大雨風吹でよ、鉦叩いで回って歩く坊さん来たけど。「今おれのかあさん、おなか痛でどって お産するなだがら、安産するようにって頼みましたと、そのとうさんが。したばなるほど安産してな、子もったけれど、男であったけな。したっけその坊さん、「一八年の寿命けできた」と言ったど。誰がさやら言ったやらわがらねけれど。したっけ、とうさん、かあさんさおしえられねし、自分で一人この子一八になれば死ぬ子だど思ってな、毎日思っていだどよ。その子さとうさん名前つけるどぎ、忘えられねど思ってな、十八（とうはち）とつけだど。毎日この子一八になれば死ぬ子だど思って、なばがとうさんつれがっただが、かあさんさもおしぇらえねしな。したばだんだん年いって死ぬ時期きてあったどよ。一八歳なる時きてな。したばそのじぎの朝間によ、大雨風でせ、ひでがったども、その子出で行くどてよ、出はったけど。飯食って行けたって食わねで出で行って、心配してらったって、三日も四日も家さ帰ってこねしな。

その子、行き行き行きして、腹もすきできたし、どごまでが行ったがわがねし、店あってな、店さ入ったば餅屋さんだけど。そこで餅買って食べだど。餅買って食べで、ちょっと脇見たばよ、きれーだ娘さんがいであったど。そいで、「お餅食べませんか」ってのべたど。したばもらったけど。さあ食べたも食べたも食べたも、店にある餅足えなくなるだけ食べてしまったどよ。こった勘定するどどになったけ、払うお金なくなってよ、その娘さんが自分でかぶってきた編笠置いでいって、こだその子どさいって言ったど、「おれこの主だども、今晩おめどで食ってしまおうと思ってあったども、あまり餅食べでしまったば、かえねぐなったから、六〇年の寿命くれてやる」って言ったじお。

そして家さ帰ったば、死んでくるものか、こねものかわからねしと思っていたば、帰って来だどて、さあえがったどて、こんだ御祝儀するどて、大騒ぎしたどやって話であった。